

じやりみち

…被災地支援情報…

第102号 発行日 2014.6.25
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

みなさまのご支援・ご協力のおかげで無事2014年度総会を終えることができました。ありがとうございました。本号は総会を中心にご報告させていただきます。

2014年度基本方針 阪神・淡路大震災から20年 もう一度原点に戻ろう！

2014年3月11日で東日本大震災の発生から丸3年が経った。複合災害の特徴である福島第1原発の過酷事故をはじめ、広域災害による避難生活の長期化などこれまでに経験のない課題が山積している。

2015年1月17日には阪神・淡路大震災から丸20年を迎える。一方、この3年間支援に奔走してきた東北を振り返ってみると阪神・淡路大震災と同じ課題も少なくない。

例えば、障がい者の死亡率は健常者に比べ2倍にも上り、「社会的弱者」の方々が被害を受ける現実には20年間変わらない。さらに震災関連死にいたっては、阪神・淡路大震災のころよりも悪化し、特に福島県の場合、直接死を超えるという深刻な事態を招いている。

また、阪神・淡路大震災から20年・新潟県中越地震10年間のあいだに、災害発生時には地域の社会福祉協議会が中心となり災害ボランティアセンターが設置されるという仕組みが整備されてきた。しかし、東日本大震災時には災害ボランティアセンターの受け入れ体制が整っていないためボランティアに行くなという論調が非常に多くみられ、結果としてボランティアの足を止めてしまった。このことは、システムに依存することで、ボランティアの多様性を阻害しているとも言えるだろう。

阪神・淡路大震災で多くの初心者ボランティアは、マニュアルもなしに被災者に寄り添ってきた。そして多様な関わり方の中で一人ひとりを支えてきた。その中で、たった一人を大切にすること、ボランティアの多様性があるからこそ多様な被災者を支えることが出来ることに気づいた。ところが、東日本大震災の被災地での課題には、まさに多様なボランティアの関わりが必要とされているにも関わらず、それが十分に出来ていない現実がある。

もう一度、原点に戻る必要があるのではないか。3.11

の課題を解決するために1.17へ立ち戻り、そして、大切なことを確実に次世代に伝えていくことが必要なのではないか。そのためには、お題目のように難しい言葉を並べるだけでなく、より身近なところで自分自身に引き寄せた問題として捉え、多様性を認め、排除されない包摂性を持った場づくりが必要だ。

阪神・淡路大震災の後、『市民とNGOの「防災」国際フォーラム』では、「神戸宣言」を発表し、その後KOBEからの発信を行ってきた。そこには、今まさに東北の被災地で必要なことが書かれている。

希望の追及と怒りの声を高くあげよう。もっと被災の厳しい実情を声高に語ろう。外国人、高齢者、障害者、女性、子どもを核に、人々のネットワークをつくり広げよう。(中略)

被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ね、新しい社会システムを創造していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み出していくことを、強く呼びかける。

20年前からのこの発信を、いかに次世代に伝えていくのか。これが阪神・淡路大震災20年を経た私たちの課題だろう。それを受け継ぐ次世代も受け身になるのではなく、新たな価値観を作り出さなければならない。新たな社会を生み出し、そしてこれからの未来を暮らしていくのは次世代自身に他ならないからである。特に次世代を担う若者が積極的に自ら語りだし、学び、つながり、つくり、決めていくことが、20年の経験を受け継いでいくことにつながる。

このように次世代への継承を意識しながら、多様性を認め、他者を排除しない包摂性を持った場を作り続けていきたい。(頼政良太)

20th
1995-2015



頼政を震災がつなぐ全国ネットワーク若手幹事会のメンバーとして、他団体と連携しながら被災地へ派遣した。また、その他のメンバーも災害ボランティアとして、現地での活動を行った。

(C) KOBE 足湯隊の活動

当センターが事務局を努める「KOBE 足湯隊」は、主に能登半島（2007 年地震発生）・兵庫県佐用町（2009 年水害発生）など地震や水害の被災地に出かけてきた。同足湯ボランティアは、2010 度から神戸学院大学を初めとする「ポーアイ 4 大学連携事業」として、佐用町へ 15 人程度の大学生（神戸大学、神戸女子短期大学、神戸学院大学）が年に 2 回入った。

東日本大震災では、神戸大学東北ボランティアバスのメンバーが被災地での足湯ボランティアを継続して行い、また KOBE 足湯隊としても活動を行った。

また、災害発生時には被災地に駆けつけ、避難所での足湯ボランティアを含む災害ボランティアを行った。

(D) 南海トラフ巨大地震に対して

南海トラフで予想される巨大地震に備えて、西日本地域での防災教室や訓練などに関わり、ネットワークを作ってきた。特にたつの市で発足した「女性が担う地域防災塾」の活動には積極的に参加した。また、アユス関西と連携した防災寺子屋の活動も行った。

また、普段連携している CODE 海外災害援助市民センターのチリ高知交流事業に参加させてもらうことで、高知県黒潮町などとのつながりを作ることが出来た。

(E) 報告会の開催

7 月 27 日に「若者の視点から見た東日本大震災を考える」シンポジウムを開催した。神戸大学東北ボランティアバスのメンバーや不良ボランティアを集める会からも報告をしてもらった。

(F) KIT つながるプロジェクト

東京の大学生の集まり【KIT つながるプロジェクト】による気仙沼スタディーツアー引率を行った。この事業は日本財団学生ボランティアセンターからの委託事業。

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなげる支援活動

当センターは CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。2013 年度も東日本大震災への支援活動などで多大なご協力をいただいた。なお、スタッフの頼政が CODE 海外災害援助市民センターに同行する形で、フィリピン台風現地調査に参加した。

4. 提言・ネットワーク事業

2012 年度から引き続き東日本大震災の支援活動として、まけないぞうと足湯を通しての提言活動を行ってきた。2 つの活動とも、支援ネットと連携し、活動の持つ意味合

いが確立されつつある。

そして、2013 年度で 9 回目を迎えた「東海地震に備えた図上訓練」での災害ボランティアネットワークには引き続き関り続けている。

また、震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）にも引き続き加盟団体・若手幹事会のメンバーとして関わった。実際に災害が発生した際にはこうしたネットワークを活用した活動を行った。

5. 広報事業

会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

- ・じやりみち 4 回発行（各約 1000 部）
- ・HP の充実化については、活動レポートやニュースを即日ブログにアップすることにより、HP や Facobook をほぼ毎日更新してきた。

6. その他

(A) 脱原発ハンガーストライキ

2012 年度から継続して脱原発ハンガーストライキを「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」持って今日まで続けてきた。

(B) 阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015

阪神・淡路大震災から 20 年を迎えるにあたって、次世代に何を伝えられるのかを議論してきた。最終的な表現方法は現在検討している段階。



■ 入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお願ひします！

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1 口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1 口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1 口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1 口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター

口座番号：01180-6-68556

被災地 NGO 協働センター 2013 年度事業報告

1. 寺子屋事業

前々年度・前年度から引き続き、「フクシマ」をテーマにした寺子屋を開催した。また、第3回は若者編として、神戸の若者と福島若者の意見交換を行った。

・Peace 寺子屋セミナー3回シリーズ

第1回(6/14)「チェルノブイリとフクシマのいま～ハンストから1年を振り返って」

講師：佐藤健太(一般社団法人ふくしま会議理事/まげねど飯館!常任理事)

第2回(9/24)「東電福島第一原発のいま…」

講師：木村信行(神戸新聞社会部記者)

第3回(11/25)若者編「～福島のことを一緒に語ろう～」

講師：鎌田千瑛美(一般社団法人ふくしま連携復興センター理事/Peach heart 共同代表/ふくしまキョウノキョウノ大学学長/せんきよ camp ふくしまメンバー/ふくしまの声ライター)

2. まけないぞう事業

昨年同様、遠野に滞在をしながら、岩手県中心に「まけないぞう」事業を展開。現在の作り手の人数は81人。

3年の節目を迎えた被災地では、阪神・淡路大震災と同様に、不安や孤独によって体調を崩す人や自ら命を落とす人も少なくない。「10日現在、警察庁によると、震や津波による直接死は15,884人、行方不明は2,633人、震災関連死は毎日新聞のまとめで10都府県3,048人に達し、福島県では直接死を上回った。」(2014年3月11日毎日新聞)、「東京電力福島第1原発事故に伴う避難で体調が悪化し死亡した事例などを、本紙が独自に「原発関連死」と定義し、福島県内の市町村に該当者数を取材したところ、少なくとも1,048人に上ることが分かった。昨年3月の調査では789人で、この1年間で259人増えた。事故から3年がたっても被害は拡大し続けている。」(2014年3月10日東京新聞) とこのように両紙は伝えている。これ以上犠牲者を出さないように、いま私たちができることを丁寧に確実にやっていかなければならない。

まけないぞうが上記の事象を少しでも回避できるものとして、これまでの実績を踏まえ、活動してきた。支援者からのメッセージを以下に紹介する。

いつも“まけないぞう”をご購入させていただいております。福島県郡山市に住んでおります。東日本大震災での原発事故での放射能の影響で、一緒に住んでいた娘家族とは離れ離れとなってしまいました。様々な不安と悲しみの中、Facebookで“makenaizone”に巡りあい、どれだけ勇気づけられたか…。

そこで“まけないぞう”の存在を知り、それを広めることで、まさしく“生きがい”を見つけたような気分になりました。

現在、夫と共に自動車販売を営んでおり、納車の際のお客様の粗品と一緒にぞうさんをさしあげて、お客様に喜ばれております。少しでもお力になればとわずかで

すがタオルをお送り致します。(福島県より)

『「まけないぞう」を作っている方へ。私は病気ですが「まけないぞう」と思って頑張っています(笑)「まけないぞう」さんが届くのを楽しみにしています』ありがとうございます。(福岡県より)

一方、作り手である被災者の方は、「ゆったりできる時間にぞうさんをつくり、それまで夜眠れないことが多かったのですが、ぞうさんを作るようになってから、眠れないことがなくなった。ぞうは家族です」と。また別の作り手さんは「名前が『がんばるぞう』ではなく『まけないぞう』というのがいい。」「これ以上何をがんばるの?まけないぞうなら勇気を持って生きて行ける。津波後、ぞうを作ることで時間を忘れる。タオルをくれた人、作る人、買う人がいてみんながつながっている。『ぞうは家族』『お嫁に行かせる気分』です。」と話してくれている。まさに「まけないぞう」が被災者にとって、明日への希望に繋がり、生きがいとなってきた。

(A) 東日本大震災支援の継続

2013年度も継続的に東日本大震災の支援を行った。売り上げは落ちてきているが、作り手さんは「生きがいになっている」とおっしゃっており、一人ひとりに寄り添う活動となってきた。作り手さんにとっては、かけがえのない“しごと”となった。

(B) 広報・販促に関して

まけないぞう専用サイト等、HPの拡充に取り掛かった。

(C) 被災地ツアー

スタッフが東北入りする際に数名のボランティアと一緒に参加してもらい、被災地の課題や被災者との触れ合いをしてもらった。

・実績:20,293頭出荷(うち子ぞう・親子ぞう・リングぞう・カップルぞうは4,624頭)

・回収、作り方講習会(岩手県遠野市、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市など)

4/22～5/9、6/25～7/9、7/29～8/23、9/5～9/9、9/30～10/24、11/28～12/8、2/24～3/17

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 東日本大震災

まけないぞう事業は引き続き、神戸からのサポート体制を継続した。また、東京大学被災地支援ネットワーク(以下・支援ネット)との連携は継続し、足湯ボランティアの集めるつぶやき分析作業を震災がつなぐ全国ネットワークの一員として共同で行ってきた。また、KOBÉ足湯隊を東北に派遣し、足湯ボランティアを実施した。

(B) その他、災害発生時の対応

2013年度は災害が多発し、68か所で災害ボランティアセンターが開設された。当センターでは、スタッフの

ACTION

1059人の「顔の見えない関係」がつなぐ 24時間リレーハンスト2年を終えて

「フクイチ」の惨状やフクイチの影響で福島県内で自殺された方が54名を数えた。また県内外に避難された方々は、一時17万人を超えている。こうした厳しい現実の中で、2012年6月、関西電力大飯原発（福井県）は再稼動を決めた。

フクイチそのものの事故後の後始末が終わっていない上に、被災者に対する健康面・医療面でのサポート体制はじめ、被災者に対する救済がほとんどなされない状態が続く中、大飯原発は再稼動したのだ。

水俣病はじめこれまでの公害事件などで繰り返して来た非人道的なことが、ここでまた繰り返されてはいけな、こんな非人間的なことが許されてはならないという思いから、ネットを通じて脱原発を掲げ、「24時間リレーハンスト」を呼びかけた。どこかに集まってみんなで実行するのではなく、各々の地で、普段の暮らしの中で決行する。先日、6月14日を持ってハンストをスタートしてから2年の月日が流れた。今、定期検査のため大飯原発は停止しており、全国の原発すべてが停止している。

さてこの夏は、半世紀ぶりに「原発ゼロの夏」を過ごすことになる。「原発ゼロの夏」に突入しても、リレーハンストをしている私たちは、むしろ楽しむように、各々の夏を過ごすだろう。

もしも政府が脱原発を決定し、停止しているならこのハンストは無事終了ができたはず。しかし、検査のため止まっているということは、動かすことが前提であることは言うまでもない。だからリレーハンストも止める訳にはいかない。でも、この夏何も問題なく過ごせたとすると、大きな前進であり、意義があるのではないか。原発がなくても生活に支障がないということだから。

加えて、2014年5月21日、福井地裁において大飯原発3,4号機の運転差し止めを命じたすばらしい判決が出された。この判決の内容については、ハンストニュースでも取り上げていることと、すでにいろいろな識者が評価されているので割愛する。ただ、1点だけあまり評価の対象として取り上げていないと思われるので注目しておきたい。それはこの判決に関して、裁判所のあるべき姿勢についてである。

「本件訴訟では、本件原発でそのような事態を招く具体的危険性が万が一でもあるかが判断の対象とされるべきで、福島原発事故後、この判断を避けるのは裁判所に課された最も重要な責務を放棄するに等しい。」

と、司法のあるべき姿に基づき断じている部分だ。行政を司る政府にも、このような姿勢を求めたいところが、辱めもなく控訴し、悪びれることもなく再稼動も示唆した。

さて、この二年間のリレーハンストには、一都二府13県（海外も3ヶ国あり）、延べ1059人の方々が賛同あるいはハンストに参加してきた。わずか一日、24時間のハンストだけれど、決行に踏み切るまでは結構ハードルが高く、それなりの「覚悟」が必要だと分かった。それでも一歩踏み出させるのは、「顔の見えない関係」でリレーをつないでいる信頼関係のようなものが、背中を押してくれるからだろう。「顔の見えない関係」だからこそ、つながりが強いことに気づかされた。

本当の意味での「原発ゼロ」社会を実現するまで、このリレーは続くことを確信する。しかし一日も早く、このリレーハンストが終わることを願っているでしょう。本当の原発ゼロの日は、もう手の届くところまで来た！！
(村井雅清)

ハンストニュースを定期的に配信しています。

過去のニュースはブログをご覧ください。

☆ブログはこちら～ <http://blog.canpan.info/stopnps/>

ニュース配信ご希望の方・ハンスト参加希望の方は

下記へご連絡をお願い致します。

TEL: 078-574-0701 E-mail: info@ngo-kyodo.org

被災地 NGO 協働センター 2014 年度事業計画

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」と連動し、阪神・淡路大震災から20年を意識しながら実施したい。特に次世代へどのように経験を引き継ぐのかを意識するため、何名かの若者に企画段階から関わってもらい、次世代が主役となる場づくりを進めていく。若者世代にとって、阪神・淡路大震災から東日本大震災を考えるよりも、東日本大震災から阪神・淡路大震災を考えることの方が身近で考えやすく、自分のこととして考えられるため、東日本大震災や「フクシマ」についての寺子屋も開催する。

2. まけないぞう事業

昨年同様、関心が薄れ販売は低迷しているが、今年度は販売目標を3万個とする。そして、阪神・淡路大震災20年目のメッセージも発信しながら、新規開拓・リピータなどの掘り起こしを行い、一層の販促の強化に励む。東北でのまけないぞう事業は今年度も継続する。被災地ではまけないぞうが「生きがい」となっている作り手さんも多く、その想いをどのように発信していくかを模索していく。また、神戸大学東北ボランティアバスとの連携の中で作り手同士の横のつながり作りを進めながら、当事者の自立をどのように支えていくかを考えていきたい。

3. 災害救援事業

災害時には迅速に対応する。特に被災者一人ひとりに対する寄り添いの視点を忘れず、かつ災害時要配慮者の支援に重点を置き続ける。また、将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震など）を念頭に置き、事前に顔の見える関係づくりを進めていくとともに、KOBE や東日本大震災の経験を活かし、しっかりと伝えていく。

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

引き続き、被災者と直接対面している足湯ボランティア活動やまけないぞう活動から見える提言を行っていく。足湯ボランティアに関しては、東京大学被災地支援ネットワークとの連携の中で、足湯ボランティアの書籍発行を進めることが提言

につながるだろう。まけないぞう活動においても同ネットワークが岩手県での被災地グッズ事業の組織化に取り組んでおり、「災害時ボランティア経済圏」という論の確立に協力していく。そして、阪神・淡路大震災から20年目に入り、市民・NGOとして次世代に伝えるための提言づくりに取り組む。

(A) 「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」の開催

阪神・淡路大震災から20年目に入ったが、東日本大震災でも阪神・淡路の時と何も改善されていないことが多数見受けられる。なぜ変わらない・伝わらないのか、どうすれば伝わるのか、次世代へ伝えるという切り口で議論を続け、何らかの形で表現していきたい。

5. 広報事業

(A) 通信「じやりみち」の発行

年4回の発行を予定
(6月 / 10月 / 1月17日 / 3月11日)

(B) ホームページの充実

HPはリニューアル予定
また、サーバーの関係でメールアドレスも変更する
新メールアドレス：info@ngo-kyodo.org

(C) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

(D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。
・ハンストニュース
・まけないぞうがつなぐ遠野物語
・その他関連ニュース

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストの継続

2012年6月14日～引き続き原発がゼロになるまで発信していく。



神戸の
事務所
で集め
ています！

被災地 NGO 協働センターでは、以下のようなものを集めています。

◎未使用ハガキ・書き損じハガキ

こうしたハガキは郵便局で手数料を払えば交換してもらえます。年賀状のあまりなどございましたらお送りください！

◎「一本のタオル運動」

以前から呼びかけている「一本のタオル運動」は現在も継続しております。集めているのは新品タオルで「まけないぞう」の材料になります。

ご協力よろしくお祈いします！



第52号 2014.6.25



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 <http://www.pure.ne.jp/~ngo>

3年半が過ぎた被災地を訪れた。まけないぞうの作り手さんはみなさん元気に過ごしておられます。でもどこか諦めにも似た、空虚な気持ちが漂っているように感じるのは私だけだろうか？被災地の状況はというと、道路や防潮堤などの公共工事は進んでいるかのように、沿岸の山々は削られ、海にコンクリートジャングルのような巨大な防潮堤の建設が各地で見られる。



▲工事のための水門

けれど、肝心な被災者の住居はまだまだ数年はかかる状況だ。ある作り手さんは「神戸も仮設が5年あったというけれど、こちらはもっとかかるんでしょうね」と、諦め顔でつぶやいた。行政からの造成などに関するスケジュールが出たが、入居予定は今から2年も先だ。しかしそれで住むかどうか？？広大な土地を約15畝かさ上げするそうだが、そこに土地にどれほどの土が必要でどれほどの予算がかかるのだろうか？？先日の新聞報道では、名取市で違法に採取された土砂が復旧工事に使われたそうだ。

そして、ある地域では津波後、新店舗をすぐに復活し、商売を始めた業者が盛り土をするという計画になり、高台への移転を余儀なくされていた。移転のための補助費用もわずかで、津波でお店を流され、早期に復旧した、いわゆる“自立再建”にも関わらず、当時は移転計画も

なかったそうだ。なぜ今になって…。店主の「しょうがないですね」というあきらめの言葉が心に残る。

また各地で砂防ダムの建設も粛々と進んでいるそうだ。現場を歩くと被災地の中に突然と森林が伐採され、大規模に山肌が削られているところが転々と存在する。ここに道路か住宅ができるのか、それにしても不自然な山の削り方をしているので、住民に尋ねると、津波の前からある計画で、震災の復旧・復興ではないそうだ。工事の人材や資材も不足している状況で、どうして砂防ダムを優先して作っているのか被災者も憤りを感じている。

また、一部復興住宅への入居も出てきてはいるがまだまだわずかだ。その中で被災者が念願の復興住宅へ入居した。しかし、鉄の扉で近所の物音すら感じず、孤独と不安に襲われている。阪神・淡路でもそうだったが、仮設は長屋住まいで隣人の物音も嫌が追うにも聞こえてくる。いわば人の存在を感じることができるのだ。しかし、鉄筋のコンクリートの復興住宅では物音一つせず、部屋にいても静まりかえってしまうのだ。そして、住み慣れた仮設では、近所との人間関係もできていたはずだが、新しい復興住宅では、また一からコミュニティを作らなければならない。以前のようにボランティアの訪問も減り、コミュニティをつくるきっかけも失われている。ある被災者は復興住宅へ入居してすぐ「人の声も聞こえない。ただ風の音だけがする。まるで牢屋に入れられているみたい。仮設へ戻



▲木が伐り倒され丸裸になった山肌

20
th

阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015

阪神・淡路大震災から 20 年目に入った。20 年の節目にキーワードとして挙げられているのは、ほとんどの場合、次世代への継承だ。しかし、次世代への継承をどのように実現するかは、未だにはっきりとは見えてこない。

次世代に何をどのように伝えるのか、ということが重要である。今までは抽象的な言葉や理念を並べて伝える側からの一方通行のようにしゃべりかけているだけであったのではないだろうか？次世代には本当の想いまで伝えきれないのではないだろうか？という想いから、どのように次世代への継承を表現していくのかについて、議論を積み重ねてきた。

2015 年 1 月に開催を予定している『阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015』では、まずは伝えられる側の次世代、特に若者（大学生や高校生など）を中心に、何を受け継ぎたいのか、今後の自分たちの生き方の中で、何を大切に生きていくのか

を考える場を作っていく。一方で、伝える世代（阪神・淡路大震災当時から活動している方々）もどのようなメッセージを発信するかを議論する場を作っていく。その上で伝える側、伝えられる側と一緒に議論する場も設けていき、全体で 3 部構成となる場を作っていくつもりだ。

6 月 26 日には、プレフォーラムとしてまずは大学生や高校生が議論をする場を設けた。次世代への継承のためには、改めてこうした「場」づくりが本当に大切だと痛感した。自分の意見を出し合い、他者の意見を尊重する場をどのように作っていくのか。今後も多様な「場」を積み上げながら、議論を重ねていきたい。（頼政良太）



事務局からの
お知らせ

事務所のメールアドレス が変わりました！

新アドレス：

info@ngo-kyodo.org

今年度中に HP もリニューアル
予定です。みなさん、よければ
のぞきにきてくださいね！

■ 編集後記

皆さん、こんにちは。編集を担当している頼政です。現在、ホームページをリニューアルすべく慣れないネットで悪戦苦闘中です。なかなか横文字ばかりで難しいのですが…

ところで、ずいぶんと暖かくなってきましたが、当センターの事務所では早くも蚊が猛威を振り始めています。不思議なもので刺されやすい人と刺されにくい人が分かれています。毎年蚊取り線香を炊くくらいしか対策をとっていないのですが、もしも効果的な蚊対策をご存知の方がいればぜひ教えて下さい！



■ 事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGO や市民社会、防災・減災のことも学ぶことができます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

りたい」とつぶやいた。その言葉を聞いた被災者の「本当にコミュニティは大切だよ」という言葉が忘れられない。こうして被災者は、避難所から仮設、復興住宅と、何度も何度もコミュニティを作り直さなければならないのだ。これは阪神・淡路大震災でも同じ状況だった。なぜ、このように同じ過ちをまた繰り返しているのだろうか。

そういう中で被災者の生きがいのひとつになっている「まけないぞう」は今も被災者に寄り添い続けている。そして、安住の住み処に移るまでには、まだ数年先になるだろう被災地の状況を見守りながら、針を運んでいる人たちがいる。「お陰さまでまけないぞうに癒され、みなさんの応援でここまでできました。」と言ってくれる。「本当に不思議だよ、ぞうさんを作っていると心が癒されるよ」、「復興住宅に移っても何もすることないから、ぞうさんに



▲陸前高田市のベルトコンベアー

▼赤い子ぞうさん



はまっている」と口々につぶやく。

いつもタオルの仕分けや販売にご協力頂いている釜石の不動寺さんに作り手さんとお邪魔した。作り手さんがバスタオルで作った特大のぞうを手渡すとなんと本堂のど真ん中に奉納して下さった。これには作り手さんも大喜びで「ありがたいね」と。またお寺に届いたタオルの中で、タオルで作った花の形をした花輪があった。式の後にこれをぞうさんの作り手さんに届けたいからと言って、わざわざタオルを花輪にしてくれたのだ。それにはお寺の方も被災地への思いをありがたく感じ、涙があふれていた。被災地を想う気持ちはいろんなかたちがあるんだとあらためてみなさんに心から感謝したい。

◎まけないぞうの作り手さんからのメッセージ

震災から早3年が過ぎ、仮設に移って6月22日で4年目に入ります。まけないぞうさんづくりに心癒されました。ぞうさんづくりがあるのはうれしいですが、災害があるのは悲しい (2014/06/09 女性 大船渡市)

ぞうさんづくり、継続が大事、頑張るぞう！ (2014/06/09 女性 大船渡市)



こたつに入り、テレビを見ながらのぞうさんづくりをさせて頂いていることに感謝しております。ありがとうございます。自分の心のはげみに感じながら作って下ります。(2014/03/01 女性 石巻市)